



## 種子島から得られた魚類 19 種

是枝伶旺<sup>1,2</sup>・松本達也<sup>3</sup>・古橋龍星<sup>4</sup>・橋本慎太郎<sup>5</sup>・出羽優風<sup>5</sup>・佐藤智水<sup>5</sup>・金井聖弥<sup>5</sup>・  
 栗山顕太<sup>5</sup>・久保田雄斗<sup>6</sup>・畠中柚菜<sup>6</sup>・前田知範<sup>6</sup>・本村浩之<sup>3</sup>

### Author & Article Info

- <sup>1</sup> 北里大学海洋生命科学部 (相模原市)  
 k4920583@kadai.jp (corresponding author)  
<sup>2</sup> 神奈川県立生命の星・地球博物館 (小田原市)  
<sup>3</sup> 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)  
<sup>4</sup> 東京都環境局 (東京)  
<sup>5</sup> 鹿児島大学大学院連合農学研究科 (鹿児島市)  
<sup>6</sup> 鹿児島大学大学院農林水産学研究科 (鹿児島市)

Received 27 May 2026  
 Revised 06 June 2026  
 Accepted 10 June 2026  
 Published 12 June 2026  
 DOI 10.34583/ichthy.68.0\_5

Reo Koreeda, Tatsuya Matsumoto, Ryusei Furuhashi, Shintaro Hashimoto, Yuna Dewa, Masayuki C. Sato, Seiya Kanai, Kenta Kuriyama, Yuto Kubota, Yuna Hatanaka, Tomonori Maeda and Hiroyuki Motomura. 2026. Records of 19 fish species from Tanega-shima island, Osumi Islands, southern Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 68: 5–19.

### Abstract

A total of 19 fish species were newly recorded based on specimens collected from Tanega-shima island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, southern Japan: *Rhinomuraena quaesita* Garman, 1888, *Uropterygius* sp. sensu Hatooka (2013) “Hoshi-kikai-utsubo” and *Uropterygius micropterus* (Bleeker, 1852) (Muraenidae); *Luciogobius griseus* Koreeda, Maeda and Motomura, 2023, *Luciogobius* sp. sensu Shibukawa (2014), *Oxyurichthys* sp. 2 sensu Shibukawa et al. (2017), *Oxyurichthys notonema* (Weber, 1909) (Oxudercidae: Gobionellinae); *Acentrogobius nigromaculatus* Koreeda and Motomura, 2025, *Favonigobius melanobranchus* (Fowler, 1934), *Favonigobius* sp. C sensu Momose (2024), *Heteroleotris poecila* (Fowler, 1946), *Oplopomus caninoides* (Bleeker, 1852), *Parkraemia saltator* Suzuki and Senou, 2013, *Silhouettea dotui* (Takagi, 1957), *Tomiyamichthys lanceolatus* (Yanagisawa, 1978) (Gobiidae: Gobiinae); *Parioglossus philippinus* (Herre, 1945) and *Ptereleotris hanae* (Jordan and Snyder, 1901) (Gobiidae: Ptereleotrinae); *Cociella crocodila* (Cuvier, 1829) (Platycephalidae); *Ambassia interrupta* Bleeker, 1853 (Ambassidae). Furthermore, six of the nine specimens deposited in Smithsonian National Museum of Natural History, which were probably voucher specimens reported by J. O. Snyder in 1912 as *Luciogobius elongatus* Regan, 1905 from Tanega-shima island, were re-identified here as *Luciogobius* sp. sensu Shibukawa (2014). This study brings the total number of recorded fish species on Tanega-shima island to 1,186.

種子島は九州南方沖に位置する島嶼であり、魚類学の観点からは 1900 年代初頭の日本魚類学黎明期から魚類相に関する研究が行われている一大産地であるといえる (Motomura, 2023a; 本村, 2024 を参照). Motomura (2023a, b) は種子島と隣接する馬毛島における魚類相をまとめあげ、1,179 種を報告した. このうち、馬毛島からしか記録のない種はタイワンザメ *Proscyllium habereri* Hilgendorf, 1904, カグラザメ *Hexanchus griseus* (Bonnaterre, 1788), トガリツノザメ *Squalus japonicus* Ishikawa, 1908, ヒレタカツノザメ *Squalus shiraii* Viana and Carvalho, 2020, ヤミウツボ *Gymnothorax monochrous* (Bleeker, 1856), ミサキウナギ *Scolecenchelys aoki* (Jordan and Snyder, 1901), サンゴミミズアナゴ *Scolecenchelys iredalei* (Whitley, 1927), ヒメ *Hime japonica* (Günther, 1877), サケガシラ *Trachipterus ishikawae* Jordan and Snyder, 1901, シロカクレウオ *Carapus kagoshimanus* (Steindachner and Döderlein, 1887), ニノジトビウオ *Hirundichthys speculiger* (Valenciennes, 1847), ダルマオコゼ *Erosa erosa* (Cuvier, 1829), ヒメオコゼ *Minous monodactylus* (Bloch and Schneider, 1801), クジメ *Hexagrammos agrammus* (Temminck and Schlegel, 1843), オオスジハタ *Epinephelus latifasciatus* (Temminck and Schlegel, 1843), シラタマアゴアマダイ *Opistognathus ctenion* Fujiwara, Motomura and Shinohara, 2023, プリモドキ *Naucrates ductor* (Linnaeus, 1758), テングチョウチョウウオ *Chaetodon selene* Bleeker, 1853, トサヤッコ *Genicanthus semifasciatus* (Kamohara, 1934), ヒメゴンベ *Cirrhilichthys oxycephalus* (Bleeker, 1855), ケサガケベラ *Bodianus mesothorax* (Bloch and Schneider, 1801), カンムリブダイ *Bolbometopon muricatum* (Valenciennes, 1840), クロヘリイトヒキベラ *Cirrhilabrus cyanopleura* (Bleeker, 1851), シマタレクチベラ *Hemigymnus fasciatus* (Bloch, 1792), モンヒラベラ *Iniistius melanopus* (Bleeker, 1857), ノドグロベラ *Macropharyngodon meleagris* (Valenciennes, 1839), ヤマユリトラギス *Parapercis kentingensis* Ho, Chang and Shao, 2012, キマダラハゼ *Astrabe flavimaculata* Akihito and Meguro, 1988, アカイ

ソハゼ *Eviota masudai* Matsuura and Senou, 2006, フタスジコバンハゼ *Gobiodon* sp. 4, セダカハナアイゴ *Siganus woodlandi* Randall and Kulbicki, 2005, およびイトヒキオキハギ *Abalistes filamentosus* Matsuura and Yoshino, 2004 の 32 種である (Motomura, 2023a, b; 本研究による再集計)。したがって, Motomura (2023a, b) が種子島から記録した種数は 1,179 から 32 を引いた 1,147 であるといえる。なお, Motomura (2023a) はミサキウナギを馬毛島から報告し, その出典として波戸岡 (2013b) を引用しているが, 波戸岡 (2013b) がミサキウナギの馬毛島からの記録の出典とした文献は Hibino et al. (2012) の国立科学博物館所蔵標本 (NSMT-P 59386) と考えられ, この標本は後にサンゴミズアナゴに再同定されているため (Hibino and Kimura, 2015), ミサキウナギの種子島・馬毛島からの記録はない (両島共に総種数も変わらない)。その後, 本村・佐藤 (2025) は Motomura (2023a, b) 以降の種子島・馬毛島からの追加種を整理・報告し, 種子島からの追加種を文献に基づき 5 種, 新規に得られた標本に基づき 13 種を報告するとともに, Motomura (2023a) が報告したイネゴチ *Cociella crocodila* (Cuvier, 1829) がササノハゴチ *Rogadius patriciae* Knapp, 1987 へ再同定されたことを報告し, 計 17 種の追加があった。その後, Yuki et al. (2025) は蒲原稔治が 1930 年に種子島から入手し, 東京大学総合研究博物館へ収蔵されていたシンカイスミツキヨウジ *Solegnathus (Solegnathus) lettiensis* Bleeker, 1860 を新たに報告した。したがって, この時点において種子島からは 1,147 種に 18 種を加えた 1,165 種が記録されていた。

2025 年の 7 月 27–29 日と 11 月 27 日から 12 月 3 日にかけて, 種子島中部における魚類相調査が行われた。この結果として計 21 種が種子島から初めて確認され (当時), 水中写真のみが知られていたハナヒゲウツボ *Rhinomuraena quaesita* Garman, 1888 の標本が得られた。このうちギブスアマクサヨウジ *Festucalex gibbsi* Dawson, 1977 とオオクチヌメリ *Eleutherochir opercularis* (Valenciennes, 1837) の 2 種は, それぞれ幸ほか (2025) と松本・本村 (2025) により既に報告されている。また, 第 1 著者によるスミソニアン自然史博物館 (USNM) における標本調査の結果, Snyder (1912) が種子島から報告したナガミミズハゼ *Luciogobius elongatus* Regan, 1905 は他種の誤同定を含むことが確認されたため, これらの結果を併せて詳細をここに報告する。本研究により種子島から記録されている魚類の総数は 1,186 種に達する。

## 材料と方法

標本の作製, 登録, 撮影, および固定方法は本村 (2009) に準拠した。標準体長 (standard length) は体長または SL, 全長 (total length) は全長または TL と表記した。計測は

ノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行った。リスト中の各種の学名と科の掲載順は本村 (2026) にしたがったが, 学名未決定種の学名は必要に応じて出典となる文献と共に明記した。種の同定は基本的に中坊 (2013) を参照したが, 他の文献, または根拠を示すことで同定を行った種については備考に記述した。雌雄と成熟段階が判明したものには標本リストまたは備考に追加した。種子島から記録のある魚種は既に Motomura (2023a) と本村・佐藤 (2025) がまとめているため, 基本的には記録の有無に関する議論は行っていない。本報告に用いた標本と生鮮時の写真は, 鹿児島大学総合研究博物館に所蔵されている。本報告で用いられている研究機関略号は Sabaj (2020) にしたがった。本報告で用いた標本は全て種子島 (鹿児島県熊毛郡中種子町・南種子町) 産であるため, 標本の項目には町以下の詳細な地名のみ表記したが, 生息地の保護の観点から一部の標本においては詳細な産地情報を省略した。

## ウツボ科

***Rhinomuraena quaesita* Garman, 1888**

**ハナヒゲウツボ (Fig. 1A)**

**標本** KAUM-I. 221687, 全長 622.5 mm, 中種子町増田犬城海岸沖, 水深 17 m, 釣り, 2025 年 12 月 1 日, 佐藤智水・出羽優風。

**備考** 緒方 (2023) は新聞記事の中で西之表市沖に生息するハナヒゲウツボの水中写真を報告した。本研究で得られた個体により, 種子島から標本に基づいて本種が記録された。本個体の生鮮時における体部の色彩は黒色を呈しており (Fig. 1A), 未成熟個体 (波戸岡, 2013a) と判断された。

***Uropterygius* sp. sensu Hatooka (2013a)**

**ホシキカイウツボ (Fig. 1B)**

**標本** 10 個体. KAUM-I. 218574, 全長 204.5 mm, KAUM-I. 218575, 全長 164.5 mm, KAUM-I. 218576, 全長 179.5 mm, KAUM-I. 218577, 全長 159.6 mm, KAUM-I. 218578, 全長 157.8 mm, KAUM-I. 218579, 全長 115.3 mm, 中種子町野間 中山漁港北側の転石海岸, 水深 0–0.1 m (干潮時), 徒手, 2025 年 7 月 26 日, 是枝伶旺; KAUM-I. 219535, 全長 272.6 mm, KAUM-I. 219536, 全長 246.3 mm, KAUM-I. 219537, 全長 224.5 mm, 中種子町野間 中山漁港北側の転石海岸, 水深 0.2–0.5 m (干潮時), 釣り, 2025 年 7 月 26 日, 是枝伶旺・金井聖弥; KAUM-I. 221673, 全長 195.1 mm, KAUM-I. 221674, 全長 180.6 mm, KAUM-I. 221675, 全長 173.4 mm, KAUM-I. 221676, 全長 94.8 mm, KAUM-I. 221723, 全長 160.8 mm, 中種子町野間 中山漁港北側の転石海岸, 水深

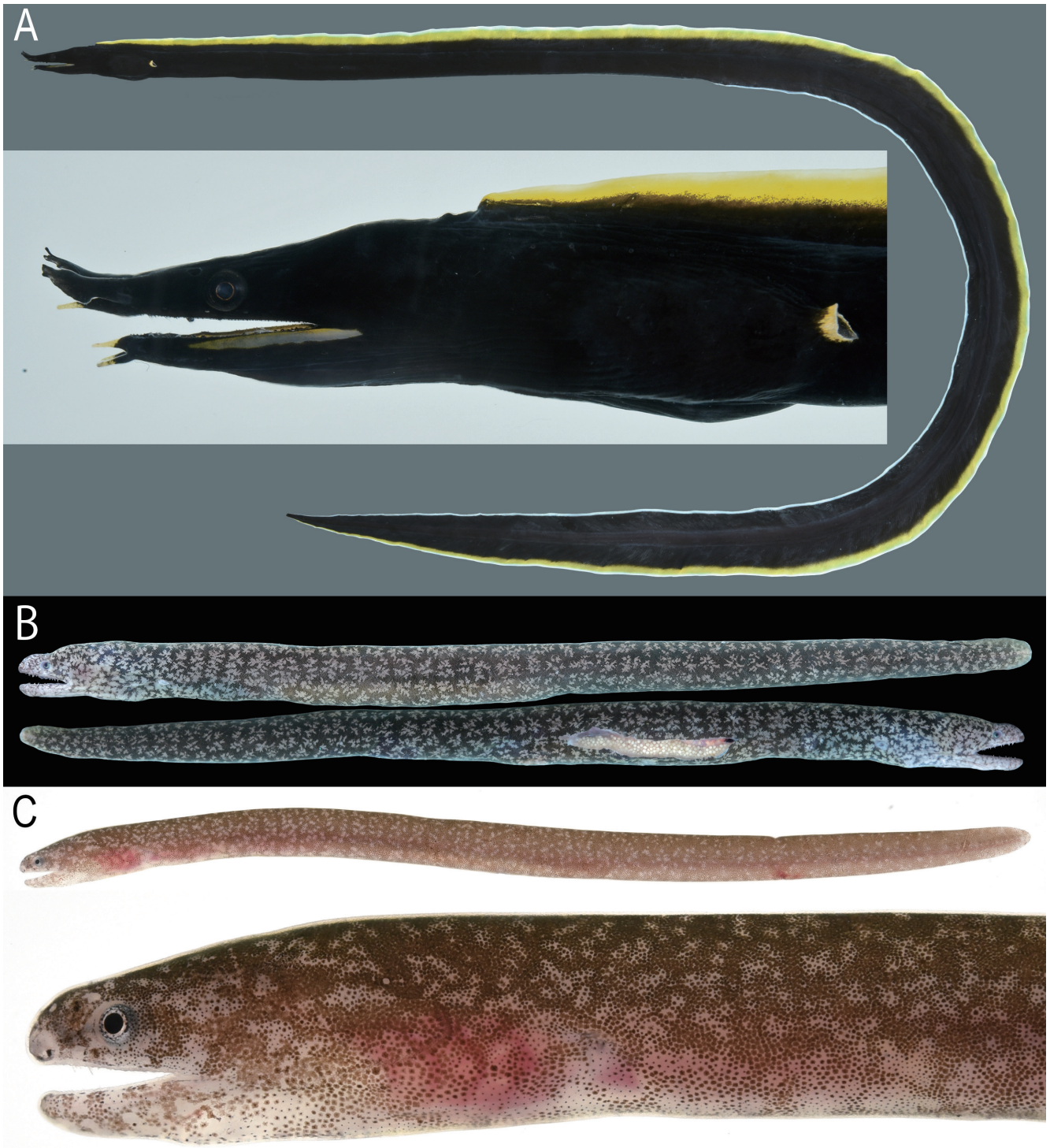


Fig. 1. Fresh specimens of *Rhinomuraena quaesita* (A: KAUM-I. 221687, 622.5 mm TL), *Uropterygius* sp. sensu Hatooka (2013a) “Hoshi-kikai-utsubo” (B: KAUM-I. 219536, ovigerous female, 246.3 mm TL) and *Uropterygius micropterus* (C: KAUM-I. 221723, 66.2 mm TL) from Tanega-shima island, Japan.

0–0.1 m (干潮時), 徒手, 2025年11月28日, 橋本慎太郎。

**備考** 本研究においてホシキカイウツボは中山漁港の堤防北側にある消波ブロック間に堆積した転石下や, 転石間から採集された。徒手と釣りで得られた個体はそれぞれ昼間と夜間に行われたものであり, 採集場所は同じである。調査日における夜間の干潮時潮位は昼間より高く, 手網を用いた調査が困難であったため, 昼間には干出していた場所で市販の釣り餌用アミエビを用いて釣獲した。餌の匂い

に誘引されてきた釣獲直前の個体は, 波の往来に由来する水面の上下に合わせた行動がみられ, 水面の上昇に伴って転石下から出現して口を開けながら索餌を行い, 波の通過に伴う水面低下と共に転石下へ戻る様子が確認された。

採集された個体は標本化までに採集地に数多く生息していたイソカニダマシ属 *Petrolisthes* Stimpson, 1858 と考えられる甲殻類の断片 (KAUM-AT. 3877) を嘔吐していた。Yukihira et al. (1994) は口永良部島で得られた本種が腹足綱

(gastropods) とカニ類を捕食していたことを報告している。第1著者らが行った調査では、採集後に種同定不能なカニ類やカニダマシ類と考えられる歩脚を嘔吐することが少なくない。

採集された個体のうち1個体 (KAUM-I. 219536) は腹部が膨満した雌個体であり、右体側を切開したところ卵巣と卵が確認された (Fig. 1B)。Moyer and Zaiser (1982) は1980年7月29日の三宅島において本種が岸近くの水深2.5 mの地点において行った産卵行動を報告している [ *Uropterygius necturus* (Jordan and Gilbert, 1882) として ]。種子島においても7月が本種の繁殖時期にあると考えられる。

### *Uropterygius micropterus* (Bleeker, 1852)

#### アミカイウツボ (Fig. 1C)

**標本** KAUM-I. 221723, 全長66.2 mm, 中種子町増田増田浦漁港東側, 水深0 m (干潮時), 徒手, 2025年12月1日, 古橋龍星。

**備考** 岩礁性海岸の潮間帯上部の潮溜まりに流入する、陸域からの微量な淡水流入の滞筋上にある転石下から得られた。本種は淡水流入のない沿岸域にもふつうにみられるが (例えば, 是枝・本村, 2023), 吉郷 (2014) が本種を琉球列島の陸水域から記録しているほか, 本研究の様に, 著者らの調査では本種がやや波当たりの弱い岩礁域やサンゴ礁域に流入する微小な淡水流入の直下で得られることが少なくない。例えば, Fujiwara and Motomura (2020) と和田ほか (2021) が報告した個体は, 両文献中において直接言及されていないが, 第1, 第3著者により河川水の影響下または微量な淡水流入直下で得られた個体である。

#### オクスデルクス科ゴビオネルス亜科

### *Luciogobius griseus* Koreeda, Maeda and Motomura, 2023 スミゾメヤリミミズハゼ (Fig. 2A, B)

**標本** 3個体。KAUM-I. 221981, 雌, 体長46.3 mm, KAUM-I. 221982, 雌, 体長38.7 mm, KAUM-I. 221983, 雄, 体長39.0 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深0 m (干潮時), たも網, 2025年11月29日, 橋本慎太郎・金井聖弥・松村優花。

**備考** Koreeda et al. (2023) は屋久島から沖縄島にかけて生息するヤリミミズハゼ種群 *Luciogobius platycephalus* complex sensu Shibukawa et al. (2019) を, Maeda et al. (2008) が沖縄島沿岸から報告した仔魚のひとつ *Luciogobius* sp. 2 と同定し, スミゾメヤリミミズハゼとして新種記載した。ヤリミミズハゼ種群はスミゾメヤリミミズハゼ *L. griseus*, ヤリミミズハゼ *Luciogobius platycephalus* Shiogaki and

Dotsu, 1976, およびハウチワヤリミミズハゼ *Luciogobius* sp. 7 sensu Shibukawa et al. (2019) の3種が含まれる (渋川ほか, 2019; Koreeda et al., 2023)。種子島産の個体は, 背鰭起部が臀鰭起部より後方にあること, 胸鰭上部に2-3本の不分枝遊離軟条があること, および肛門と臀鰭間の距離が肛門における体高の半分よりはるかに長いことから, 渋川ほか (2019) と Koreeda et al. (2023) の定めたヤリミミズハゼ種群に一致し, 更に胸鰭の鰭条は遊離した不分枝鰭条を除いて分枝すること, 腹鰭後端から肛門までの直線距離と背鰭前長の和が体長よりも明らかに長いこと (104.0-107.7%) からスミゾメヤリミミズハゼに同定された (腹鰭後端から肛門までの直線距離と背鰭前長の和はヤリミミズハゼでは95.4-101.6%; ハウチワヤリミミズハゼでは98.4-102.1%: Koreeda et al., 2023)。

スミゾメヤリミミズハゼはこれまで屋久島から沖縄島にかけて記録されており (Koreeda et al., 2023), 本研究で得られた種子島産の個体により, 大隅線 Osumi Line (Motomura and Harazaki, 2017; Motomura and Matsunuma, 2022) を超えて分布北限と東限がわずかに更新された。

### *Luciogobius* sp. sensu Shibukawa (2014)

#### ナンセンハゼ近似種 (Fig. 2C-G)

**標本** 6個体。KAUM-I. 219794, 体長27.2 mm, KAUM-I. 219795, 体長26.7 mm, KAUM-I. 219796, 体長23.7 mm, KAUM-I. 219797, 体長21.5 mm, 中種子町野間 中山漁港北側の転石海岸, 水深0-0.1 m (干潮時), 2025年7月27日, 是枝伶旺; KAUM-I. 222008, 体長38.7 mm, KAUM-I. 222009, 体長34.2 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深0 m (干潮時), たも網, 2025年11月29日, 橋本慎太郎・金井聖弥・松村優花。

**備考** 本研究で得られた標本は背鰭の総鰭条数が10-11, 臀鰭の総鰭条数が11-13, 胸鰭条数が11-12で上端の1鰭条が遊離すること, 腹鰭に小さいが完全な膜蓋をもつこと (Fig. 2D), および肛門と臀鰭起部間の距離は肛門直上における体高の半分以上であることが渋川 (2014) と望月ほか (2022) の示したミミズハゼ属の一種 *Luciogobius* sp. sensu Shibukawa (2014) に類似することから本種に同定された。ミミズハゼ属には多数の学名不詳種が存在し (Maeda et al., 2008; 渋川ほか, 2019), ミミズハゼ属の一種とする呼称は他種との混同が考えられるため, 本研究においては本種をナンセンハゼ近似種と呼称する。本標本は背鰭と臀鰭の総鰭条数がそれぞれ10-11と11-13であることに於いて, 9と12とした渋川 (2014) と望月ほか (2022) の示した値よりわずかに多いが, 種内変異とみなした。

近年に台湾から記載された *Luciogobius chaojinensis* Chen, Ren, Jiang, Wang and Chang, 2024 と *Luciogobius delicatus*

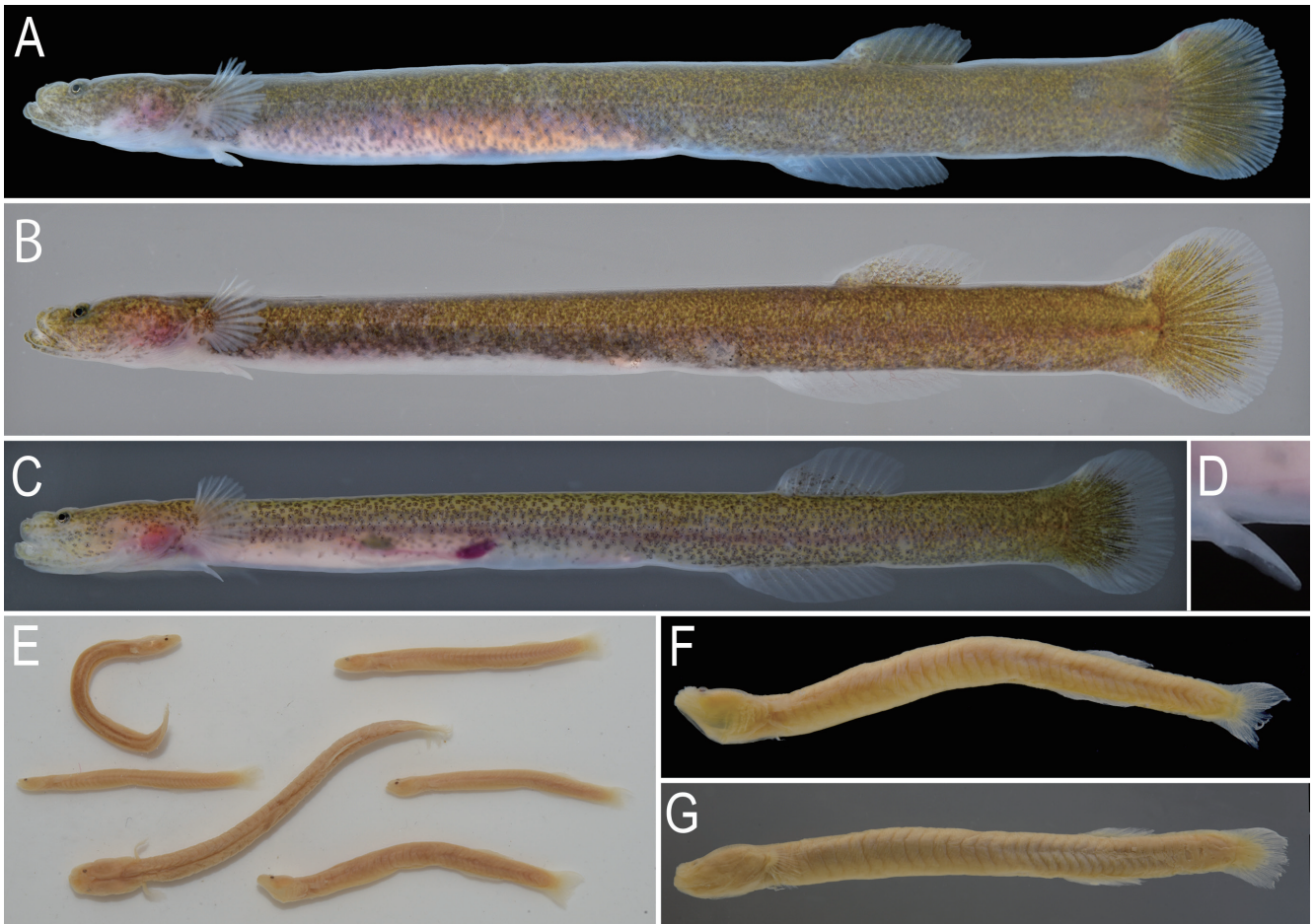


Fig. 2. Fresh specimens of *Luciogobius griseus* (A: KAUM-I. 221981, female, 46.3 mm SL; B: KAUM-I. 221983, male, 39.0 mm SL), and fresh (C, D) and preserved (E–G) specimens of *Luciogobius sp. sensu Shibukawa (2014)* (C and D: KAUM-I. 222008, 38.7 mm SL; E–G: USNM 71478, 24.1–36.8 mm) from Tanega-shima island, Japan. All photos, except D (close-up of pelvic fin and its frenum), showing whole body.

Chang, Shen and Chen, 2025 はナンセンハゼ近似種と形態的特徴がよく似るが、少なくとも *L. chaojinensis* と考えられる台湾産の一般標本と比較すると肛門 - 臀鰭起部間の距離が長い傾向にある (是枝, 未発表). また, *L. delicatus* は計数形質と生時の色彩が白いことで *L. chaojinensis* と識別されるとされるが (Chen et al., 2024; Chang et al., 2025), 計数形質で *L. chaojinensis* に同定される上述の台湾産一般標本は生時の色彩が通常白色を呈しており (是枝, 未発表), *L. delicatus* の識別形質と有効性の再検討が必要である. 本研究においてはこれら 3 タクサを暫定的に別種とし, 日本産のみをナンセンハゼ近似種とした.

Snyder (1912) は種子島のタイドプールから得られ, 腹鰭は小さいが鱗状ではなく, 4 鰭条を有する特徴をもつミミズハゼ属の 9 個体を *Luciogobius elongatus* (ナガミミズハゼ) に同定し, 報告した. 原記載である Regan (1905) は *L. elongatus* の腹鰭が小さく鱗の様な皮弁状で明瞭な鰭条をもたないとしているため, 恐らく Snyder (1912) はこれに対比するように鱗状ではない (つまり鰭条をもつ) という表現を用いたと考えられる. そのため, 原記載とは完全に一致していないが, 吸盤状を呈さない腹鰭をもつミミ

ズハゼ属は当時 *L. elongatus* のみが知られていたことから, これが Snyder (1912) の *L. elongatus* に同定した判断材料であったと考えられる. しかし, 実際は腹鰭が皮弁状または不完全か退縮的な小さな膜蓋をもつことで明瞭な吸盤とならないミミズハゼ属魚類は日本国内からはナガミミズハゼ *L. elongatus*, ナンセンハゼ *L. parvulus* (Snyder, 1909), ミズヒキナガミミズハゼ *Luciogobius sp. 9 sensu Shibukawa et al. (2019)*, およびナンセンハゼ近似種の 4 種が知られており, いずれも鰭条を有する (渋川ほか, 2019; 望月ほか, 2022; 本研究). したがって Snyder (1912) の記述のみでは再同定が不可能である.

この記録の出典の一部と考えられる 6 標本が, 1906 年に種子島で採集されたとされる USNM 71478 (体長 24.1–36.8 mm: Fig. 2E–G) である. これらの 6 標本のうち最大標本を除く 5 標本は背鰭の総鰭条数が 10 または 11 であること, 臀鰭の総鰭条数が 12 または 13 であること, 胸鰭条数が 12–13 で上端の 1 鰭条が遊離すること, および腹鰭に小さいが完全な膜蓋をもつことにおいて, 渋川ほか (2019) の定義したナガミミズハゼに一致せず, むしろナンセンハゼ近似種に概ね一致する (ただし既報の値より臀鰭と胸鰭

の鰭条数が1多い)。本研究においてはこれらをナンセンハゼ近似種に同定し、鰭条数の変異は種内変異の範疇とみなした。これら6標本のうち最大個体(体長36.8 mm: Fig. 2G)は腹鰭部分が損傷していたため形態を確認できず、ナンセンハゼ近似種と日本産種では最も類似するナンセンハゼ *Luciogobius parvulus* (Snyder, 1909) のどちらであるか判断できなかったが、ナンセンハゼは通常腹鰭がなく、ある場合においても膜蓋はないこと(渋川ほか, 2019; 望月ほか, 2022)、他の5個体はナンセンハゼ近似種に再同定されたことから、暫定的に最大個体も他と同種と判断した。Snyder (1912) が種子島から確認した9個体のうち調査できなかった3標本はナンセンハゼ近似種であったかは判断できなかったが、少なくとも5個体がナンセンハゼ近似種であることが本研究により明らかとなった。なお、ナガミズハゼは少数ながら種子島に生息し(Motomura, 2023a)、本研究においても1個体(KAUM-I. 219793, 体長30.5 mm)がナンセンハゼ近似種とほぼ同所で採集された。著者らは2020年以降、潮間帯の基質間隙に生息する魚類に着目した調査を行っているが、北海道から九州南部にかけて広く分布するナンセンハゼは(渋川ほか, 2019; 古橋ほか, 2020; 金井ほか, 2025)、種子島を含む大隅諸島以南からはこれまでに得られていない(Motomura, 2023a; 本研究)。

#### ***Oxyurichthys* sp. 2 sensu Shibukawa et al. (2017)**

##### **イレズミサルハゼ (Fig. 3A)**

**標本** KAUM-I. 219594, 体長14.2 mm, 中種子町納官浜津脇港, 水深1–5 m, たも網, 2025年7月27日, 佐藤智水。

**備考** 種子島産の標本は、胸鰭軟条数が23であり、胸鰭基底部分の上半分のみには黒色横帯をもつ。日本産サルハゼ属のうち、上記の2形質を満たす種は後述のナガセハゼ *Oxyurichthys notonema* (Weber, 1909) とイレズミサルハゼの2種である(瀬能ほか, 2004, 2021; 明仁ほか, 2013; Pezold and Larson, 2015; 渋川ほか, 2017; 中村ほか, 2025a, b)。本研究ではこれらの2形質をもつサルハゼ属の稚魚が多数得られた。臀鰭基底部分の第2軟条基部直後から第12軟条直前にかけての各鰭条基部間にそれぞれ1つの黒色点をもつタイプA (KAUM-I. 219594, 体長14.2 mm: Fig. 3A) と、臀鰭基底部分の第2–5軟条と第6–10軟条の基部間のみ黒色素が分布するタイプB (KAUM-I. 219506, 219507, 219558, 体長16.1–17.2 mm: Fig. 3B) である。この2タイプ間では、眼下の黒色素分布(タイプAは眼下から口角部にかけて黒色斜帯があるがタイプBにはない)や頭部腹面の黒色素分布(タイプAにはなく、タイプBにはある)にも差異がみられる。本研究ではPezold and Larson (2015) と渋川ほか (2017) を参考にナガセハゼと同

定された標本 (KAUM-I. 219195, 219196, 221767, 221921, 221922, 221926, 体長17.6–49.7 mm: 同定根拠はナガセハゼの項目を参照) が得られており、タイプBの稚魚はこれらと臀鰭基底部分の黒点列が第5–6軟条間で明瞭に分断されること (KAUM-I. 221926, 体長17.6 mm: Fig. 3C; KAUM-I. 221922, 体長30.4 mm: Fig. 3D) において一致する。したがって、本研究ではタイプBをナガセハゼに同定すると共に、眼下と頭部腹面における黒色素分布の違いから、タイプAをイレズミサルハゼに同定した。イレズミサルハゼは眼下から口角部にかけて黒色斜帯があり(瀬能ほか, 2004, 2021; 木村ほか, 2017; 渋川ほか, 2017)、この点においてもタイプAと一致する。なお、近年の言及はないがPezold and Larson (2015) は西表島産のZUMT 60467を *Oxyurichthys limophilus* Pezold and Larson, 2015に同定しており、*O. limophilus* も上記2種と同様に胸鰭基底部分の上半分にかかる黒色横帯をもち、胸鰭軟条数が23に達するが、*O. limophilus* は眼下から口角部にかけて黒色帯をもたないことからイレズミサルハゼと識別できる。*Oxyurichthys limophilus* はケニアと西表島からのみ記録されているが、Pezold and Larson (2015) は特に理由を述べず日本産の本種に関して追加標本に基づく再検討が望まれるとしている。

#### ***Oxyurichthys notonema* (Weber, 1909)**

##### **ナガセハゼ (Fig. 3B–E)**

**標本** 9個体。KAUM-I. 219506, 体長16.1 mm, KAUM-I. 219507, 体長17.2 mm, KAUM-I. 219558, 体長16.7 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深0.5–1 m (干潮時), たも網, 2025年7月28日, 是枝伶旺・金井聖弥; KAUM-I. 219195, 体長45.8 mm, KAUM-I. 219196, 体長22.5 mm, 中種子町坂井 梶瀉漁港, 水深3 m, たも網, 2025年7月25日, 佐藤智水; KAUM-I. 221767, 体長25.4 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深1–7 m, たも網, 2025年11月28日, 佐藤智水・出羽優風; KAUM-I. 221921, 体長49.7 mm, KAUM-I. 221922, 体長30.4 mm, KAUM-I. 221926, 体長17.6 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深1–7 m, たも網, 2025年12月1日, 佐藤智水・出羽優風。

**備考** 上述のタイプBとした稚魚 (KAUM-I. 219506, 219507, 219558, 体長16.1–17.2 mm) を除く個体は第1背鰭第1–5棘が伸長すること(ただし体サイズの小さな個体ほど第2–5棘の伸長部は短い)、体の後半部に櫛鱗をもつこと、背鰭前方の正中線上に皮質隆起があること、眼上に皮弁や突起がないこと、体側中央の黒斑の間には=状の黒斑があること、胸鰭基底部分上半分に黒色斑(または横帯)があること、臀鰭外縁部分の直上に黒点列があること、および尾鰭に明瞭な黒色斑がないことが瀬能ほか (2004, 2021)

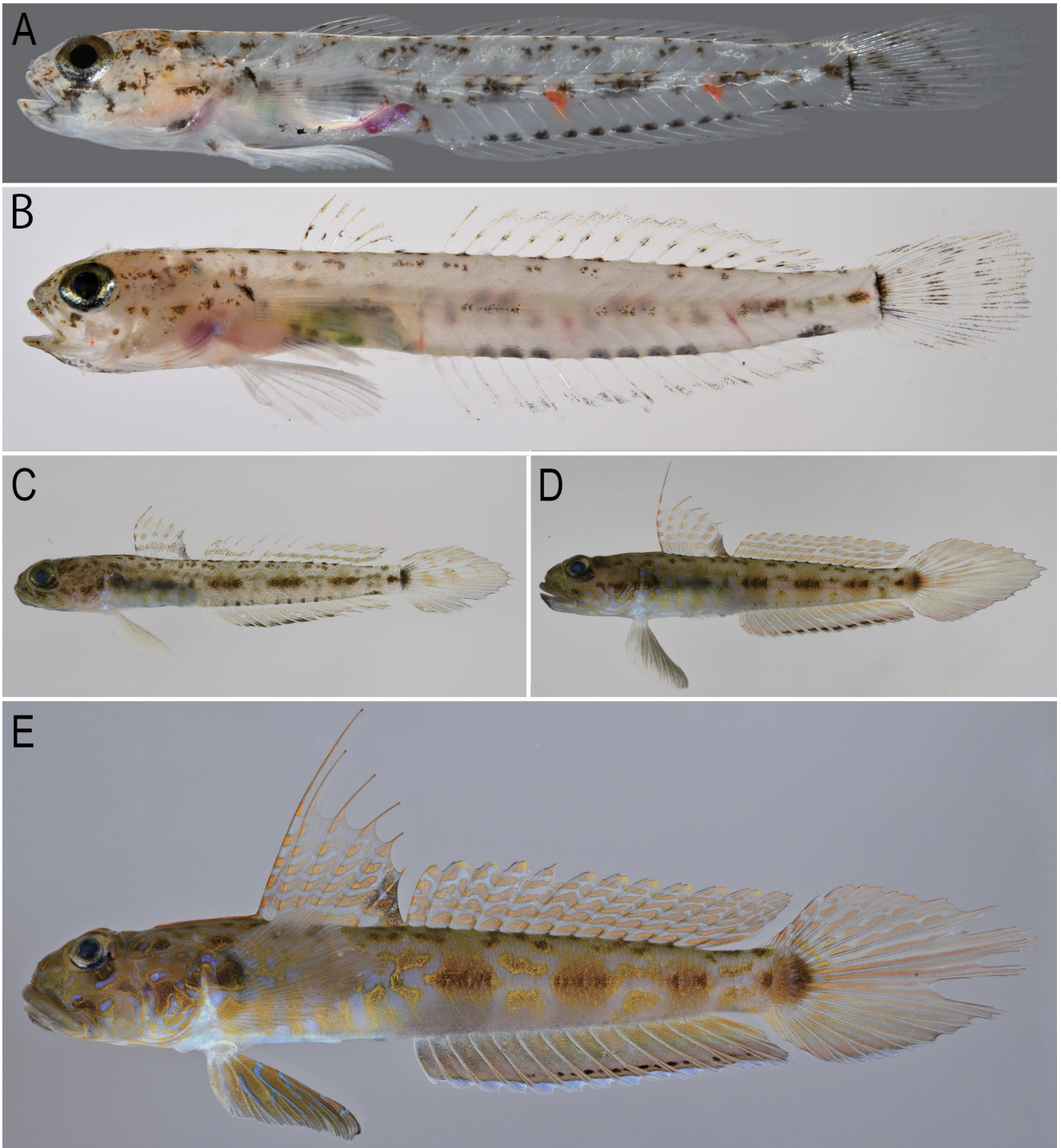


Fig. 3. Fresh specimens of *Oxyurichthys* sp. 2 sensu Shibukawa et al. (2017) (A: KAUM-I. 219594, 14.2 mm SL) and *Oxyurichthys notonema* (B: KAUM-I. 219507, 17.2 mm; C: KAUM-I. 221926, 17.6 mm SL; D: KAUM-I. 221922, 30.4 mm SL; E: KAUM-I. 219195, 45.8 mm SL) from Tanega-shima island, Japan.

と渋川ほか (2017) の示したナガセハゼの識別形質に一致したため本種に同定された。稚魚個体の同定根拠はイレズミサルハゼの備考を参照。

ハゼ科ハゼ亜科

***Acentrogobius nigromaculatus* Koreeda and Motomura, 2025**  
**イッテンホホグロスジハゼ** (Fig. 4A–D)

**標本** 3 個体。KAUM-I. 219194, 雌, 体長 20.7 mm,

中種子町坂井 梶潟漁港, 3 m, たも網, 2025 年 7 月 25 日, 佐藤智水; KAUM-I. 219560, 雄, 体長 25.3 mm, KAUM-I. 219561, 雌, 体長 20.4 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 1 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 28 日, 是枝伶旺。

**備考** Koreeda and Motomura (2025) は従来 *Acentrogobius suluensis* (Herre, 1927) (ホホグロスジハゼ) に混同されていた *A. nigromaculatus* (イッテンホホグロスジハゼ) を新種として記載した。イッテンホホグロスジハゼは第 1 背鰭第 3 または第 4 棘が最長であり, 第 4 棘の先端が糸状に伸

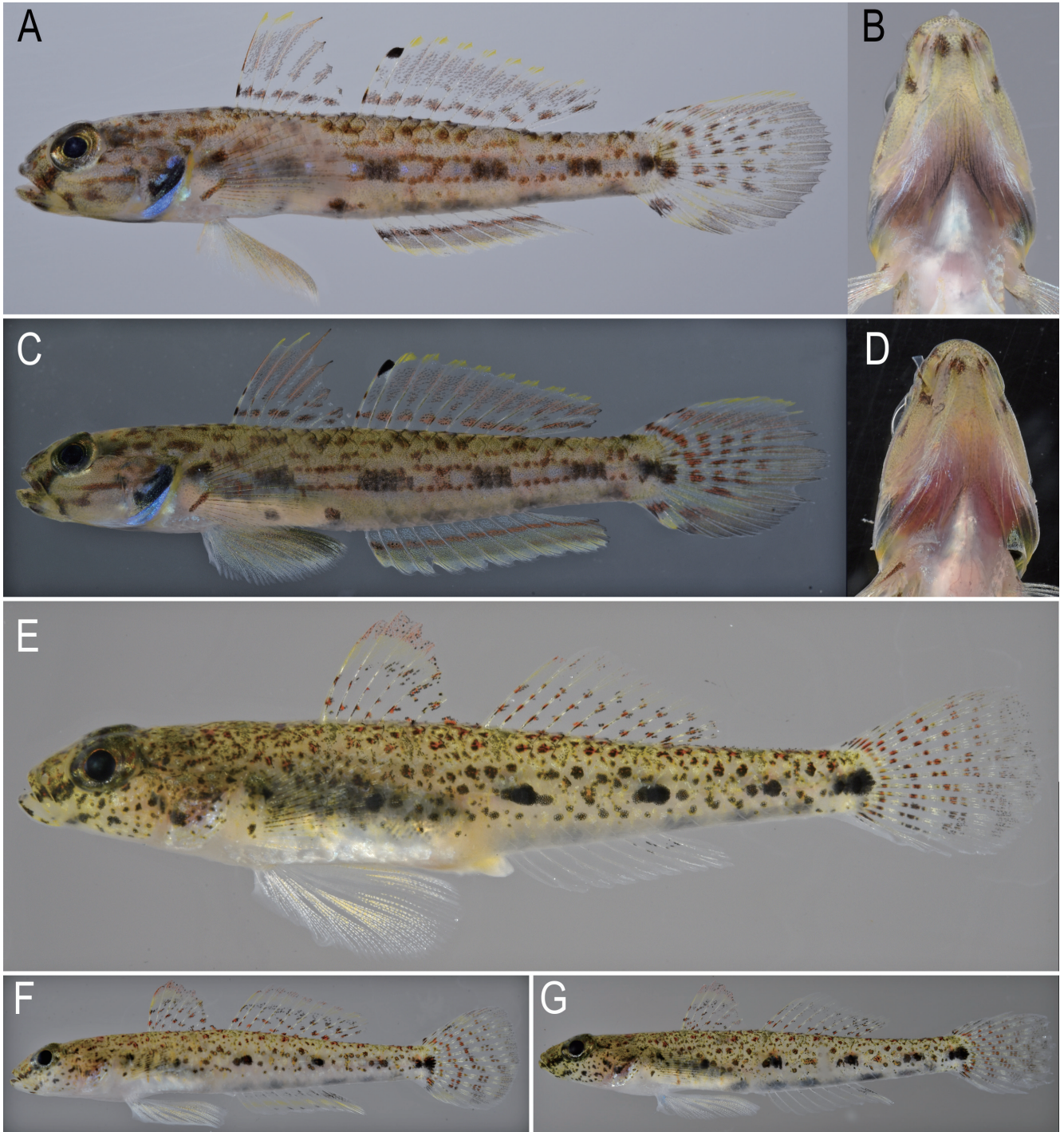


Fig. 4. Fresh specimens of *Acentrogobius nigromaculatus* (A and B: KAUM-I. 219560, male, 25.3 mm SL; C and D: KAUM-I. 219194, female, 20.7 mm SL) and *Favonigobius melanobranchus* (E: KAUM-I. 221961, female, 22.4 mm SL; F: KAUM-I. 222011, male, 21.7 mm SL; G: KAUM-I. 221790, male, 24.0 mm SL) from Tanega-shima island, Japan. All photos, except B and D (close-up of ventral heads), showing whole body.

長すること（ホホグロスジハゼは第2棘が最長で、第4棘は伸長しない）、頤に1対の黒斑があること（頤を横断する1つの黒斑）、第2背鰭棘先端付近に1黒斑をもつこと（ない）、尾鰭の上縁が黄色いこと（赤い）、および体側に赤色横帯がないこと（あることもある）から識別され、イッテンホホグロスジハゼは日本国内においては九州、屋久島、奄美大島、および西表島から標本または写真に基づき記録されている（Koreeda and Motomura, 2025）。本研究で得られた標本も上述のイッテンホホグロスジハゼの識別形質に

一致した。なお、大塩屋漁港で得られた標本の産地情報は幸ほか（2025）と同じである。

#### *Favonigobius melanobranchus* (Fowler, 1934)

クロヒメハゼ (Fig. 4E–G)

標本 6個体。KAUM-I. 221790, 雄, 体長 24.0 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 0.5 m (干潮時), たも網, 2025年11月29日, 金井聖弥; KAUM-I. 221906, 体

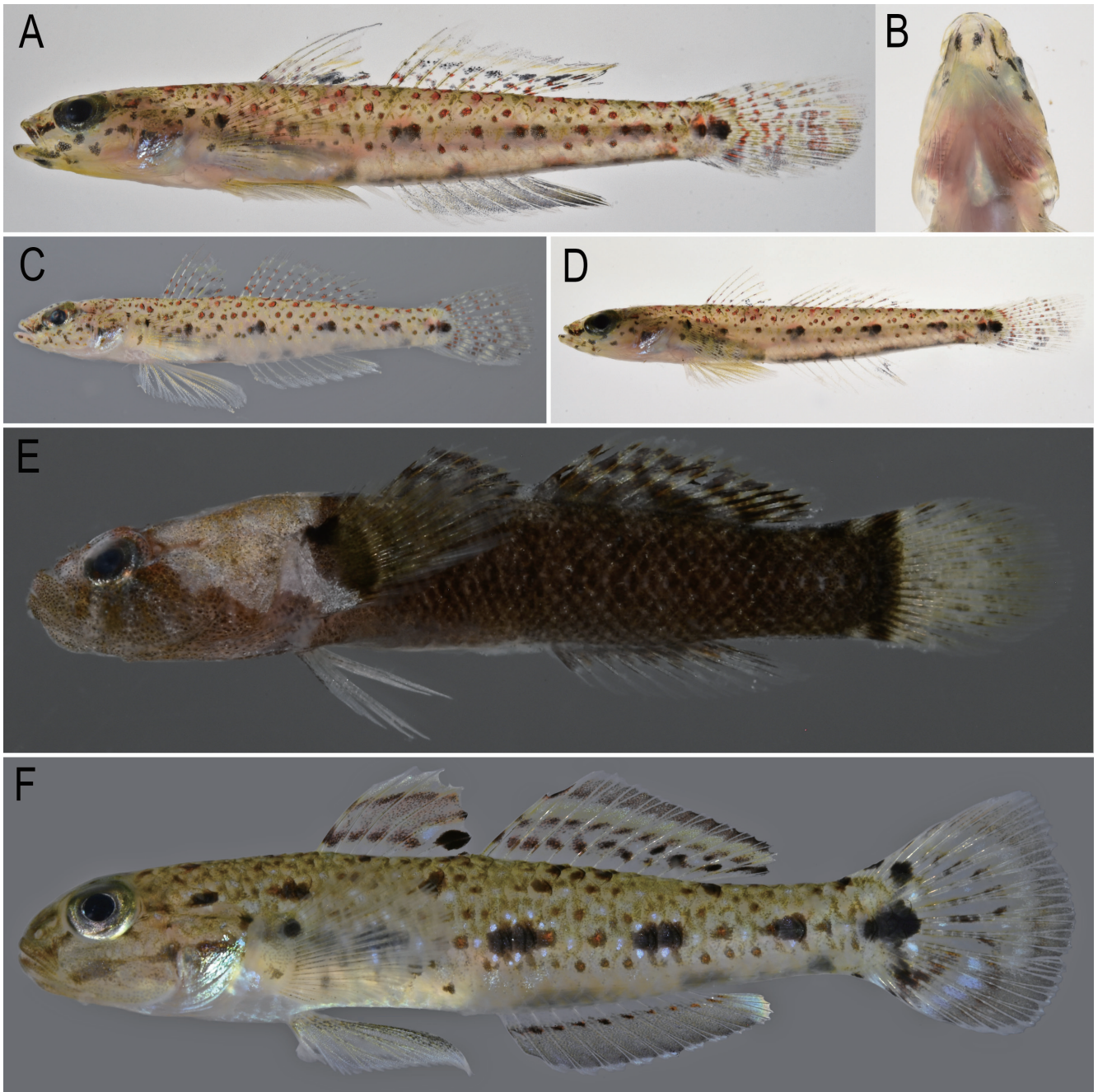


Fig. 5. Fresh specimens of *Favonigobius* sp. C sensu Momose (2024) (A and B: KAUM-I. 219550, male, 21.8 mm SL; C: KAUM-I. 219503, male, 21.2 mm; D: KAUM-I. 219551, female, 17.9 mm SL), *Heteroleotris poecila* (E: KAUM-I. 219470, 13.6 mm SL) and *Oplopomus caninoides* (F: KAUM-I. 219251, 31.5 mm SL) from Tanega-shima island, Japan. All photos, except B (close-up of ventral head), showing whole body.

長 21.0 mm, KAUM-I. 221910, 体長 14.8 mm, KAUM-I. 221961, 雌, 体長 22.4 mm, KAUM-I. 221962, 体長 19.6 mm, KAUM-I. 222011, 雄, 体長 21.7 mm, 中種子町増田大塩屋漁港, 水深 0.5 m (干潮時), たも網, 2025 年 11 月 30 日, 古橋龍星・橋本慎太郎・金井聖弥.

**備考** 明仁ほか (2013) はクロヒメハゼの雄の腹部側面に横線模様がないことを, これをもつミナミヒメハゼとの識別形質とした. しかし, クロヒメハゼに同定される個体にはやや不鮮明ながら存在することがあり (例えば, 瀬能ほか, 2004, 2021; Bogorodsky et al., 2011), 本研究において得られた雄 1 個体 (KAUM-I. 222011, 体長 21.7 mm :

Fig. 4F) にも胸鰭基底直後に黄色横線が存在している.

本種の記録はこれまで奄美大島以南に限定されており (明仁ほか, 2013; 吉郷, 2014; 百瀬, 2024), 本研究において得られた種子島産の個体により分布北限が更新された. 本種がこれまでに種子島以北で得られていないこと, 7 月の調査で得られていないことから, 種子島における出現は無効分散の可能性が高いが, KAUM-I. 221961 (体長 22.4 mm) は腹部が膨満し, 泌尿生殖孔突起が発達した雌個体であり, 再生産が行われている可能性も考えられる. 標本の産地情報は幸ほか (2025) と同じである.

**Favonigobius sp. C** sensu Momose (2024)

ヒメハゼ属の一種 C (Fig. 5A–D)

**標本** 6 個体. KAUM-I. 219299, 体長 14.2 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 1 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 27 日, 是枝伶旺; KAUM-I. 219503, 雄, 体長 20.7 mm, KAUM-I. 219550, 雄, 体長 20.8 mm, KAUM-I. 219551, 体長 17.6 mm, KAUM-I. 219552, 体長 17.9 mm, KAUM-I. 219553, 体長 17.1 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 1 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 28 日, 是枝伶旺・金井聖弥.

**備考** 本研究で得られた標本は背鰭と臀鰭の軟条数が 8 であること (KAUM-I. 219550 は共に 7), 頭高が体長の 11.7–13.4% と低いこと, 尾鰭分枝軟条数が 6 + 6 であること, 体背側に散在する小斑はよく目立つ緋色であること, および雄は頤に 1 対の大きな黒色斑をもち (Fig. 5B), 第 1 背鰭の黒色斑の直下に黄色帯がないこと (Fig. 5A, C) が百瀬 (2024) の示した本種の特徴に概ね一致し, 本種に同定された. 産地情報は幸ほか (2025) と同じである.

**Heteroleotris poecila** (Fowler, 1946)

シロズキンハゼ (Fig. 5E)

**標本** 2 個体. KAUM-I. 219299, 体長 10.3 mm, 中種子町野間 中山漁港北側の転石海岸, 水深 0.3 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 26 日, 橋本慎太郎; KAUM-I. 219470, 体長 13.6 mm, 中種子町野間 中山漁港北側の転石海岸, 水深 0.1 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 27 日, 是枝伶旺.

**Oplopomus caninoides** (Bleeker, 1852)

ウスゲシヨウハゼ (Fig. 5F)

**標本** KAUM-I. 219251, 体長 31.5 mm, 中種子町納官 浜津脇港, 水深 1–5 m, たも網, 2025 年 7 月 26 日, 佐藤智水

**Parkraemeria saltator** Suzuki and Senou, 2013

ギンポハゼ (Fig. 6A, B)

**標本** 2 個体. KAUM-I. 219514, 雄, 体長 31.7 mm, KAUM-I. 219569, 雌, 体長 27.6 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 0.5 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 28 日, 金井聖弥・前田知範.

**備考** ギンポハゼはこれまで奄美大島以南から記録されており (是枝ほか, 2022), 本研究で得られた個体により分布北限が更新された. 産地情報は幸ほか (2025) と同じである.

**Silhouettea dotui** (Takagi, 1957)

シラヌイハゼ (Fig. 6C, D)

**標本** 4 個体. KAUM-I. 219799, 体長 19.5 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 0.5 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 27 日, 金井聖弥; KAUM-I. 219504, 雌, 体長 16.6 mm, KAUM-I. 219505, 体長 15.9 mm, KAUM-I. 219562, 体長 14.6 mm, KAUM-I. 219570, 体長 14.7 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 0.5 m (干潮時), たも網, 2025 年 7 月 28 日, 是枝伶旺・金井聖弥・前田知範.

**備考** 本研究で得られた標本は大塩屋漁港内の細かい砂質を中心とした, 潮間帯から潮下帯へと連続する斜面から稀に採集され, 泥質の環境から得られた上述のイッテンホボグロスジハゼやヒメハゼ属の一種 C と同時に得られることはなかった.

KAUM-I. 219504 (体長 16.6 mm) は他個体と比べてやや膨満した腹部が黄色を呈し, 発達した泌尿生殖孔突起をもつ (Fig. 6D) ことから, 既に成熟した個体である可能性が示唆される. 是枝・本村 (2025) は鹿児島県本土の大浦川において本種の繁殖例を報告し, 図示された雌個体はいずれも黄色の腹部をもつことで上述の種子島産個体に一致する.

本種はこれまでに青森県から鹿児島県本土にかけての日本と台湾からのみ知られており (明仁ほか, 2013; Senou, 2020; 是枝・本村, 2025), 本研究で得られた個体により本種の国内における分布南限がわずかに更新された.

**Tomiyamichthys lanceolatus** (Yanagisawa, 1978)

ヤジリハゼ (Fig. 6E)

**標本** 5 個体. KAUM-I. 219198, 体長 26.4 mm, KAUM-I. 219193, 体長 35.3 mm, KAUM-I. 219194, 体長 38.2 mm, 中種子町坂井 梶潟漁港, 水深 3 m, たも網, 2025 年 7 月 25 日, 佐藤智水; KAUM-I. 219279, 体長 17.1 mm, KAUM-I. 219280, 体長 17.1 mm, 中種子町納官 浜津脇港, 水深 1–5 m, たも網, 2025 年 7 月 27 日, 佐藤智水.

ハゼ科クロコリハゼ亜科

**Parioglossus philippinus** (Herre, 1945)

ベニツケサツキハゼ (Fig. 7A, B)

**標本** 3 個体. KAUM-I. 219463, 体長 13.1 mm, KAUM-I. 219464, 体長 12.8 mm, KAUM-I. 219465, 体長 12.1 mm, 中種子町増田 大塩屋漁港, 水深 3 m, たも網, 2025 年 7 月 27 日, 是枝伶旺.

**備考** 本研究で得られた標本は大塩屋漁港内の岸壁の

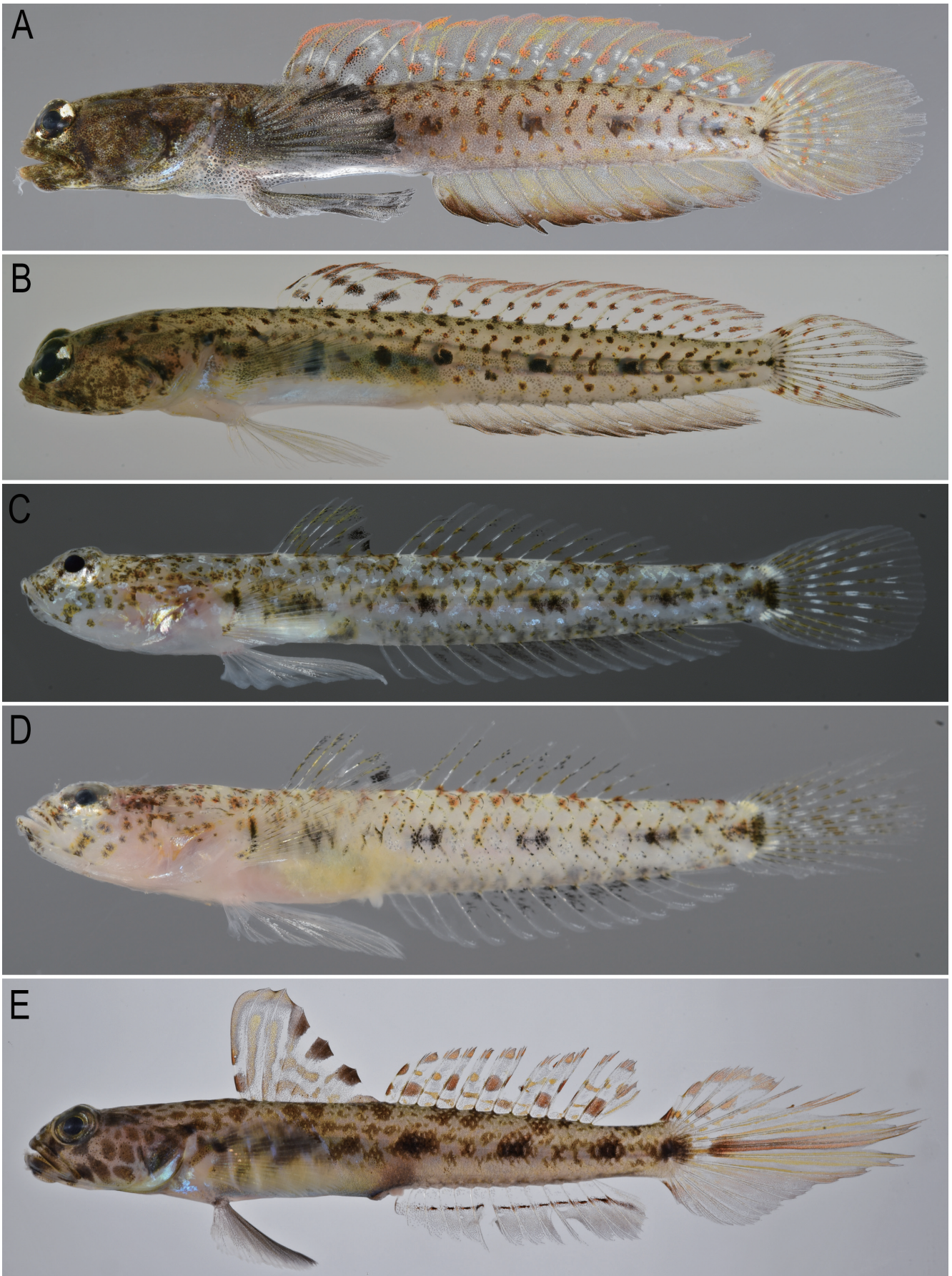


Fig. 6. Fresh specimens of *Parkraemeria saltator* (A: KAUM-I. 219514, male, 31.7 mm SL; B: KAUM-I. 219569, female, 27.6 mm SL), *Silhouettea dotui* (C: KAUM-I. 219799, 19.5 mm SL; D: KAUM-I. 219504, female, 16.6 mm SL) and *Tomiyamichthys lanceolatus* (E: KAUM-I. 219193, 35.3 mm SL) from Tanega-shima island, Japan.

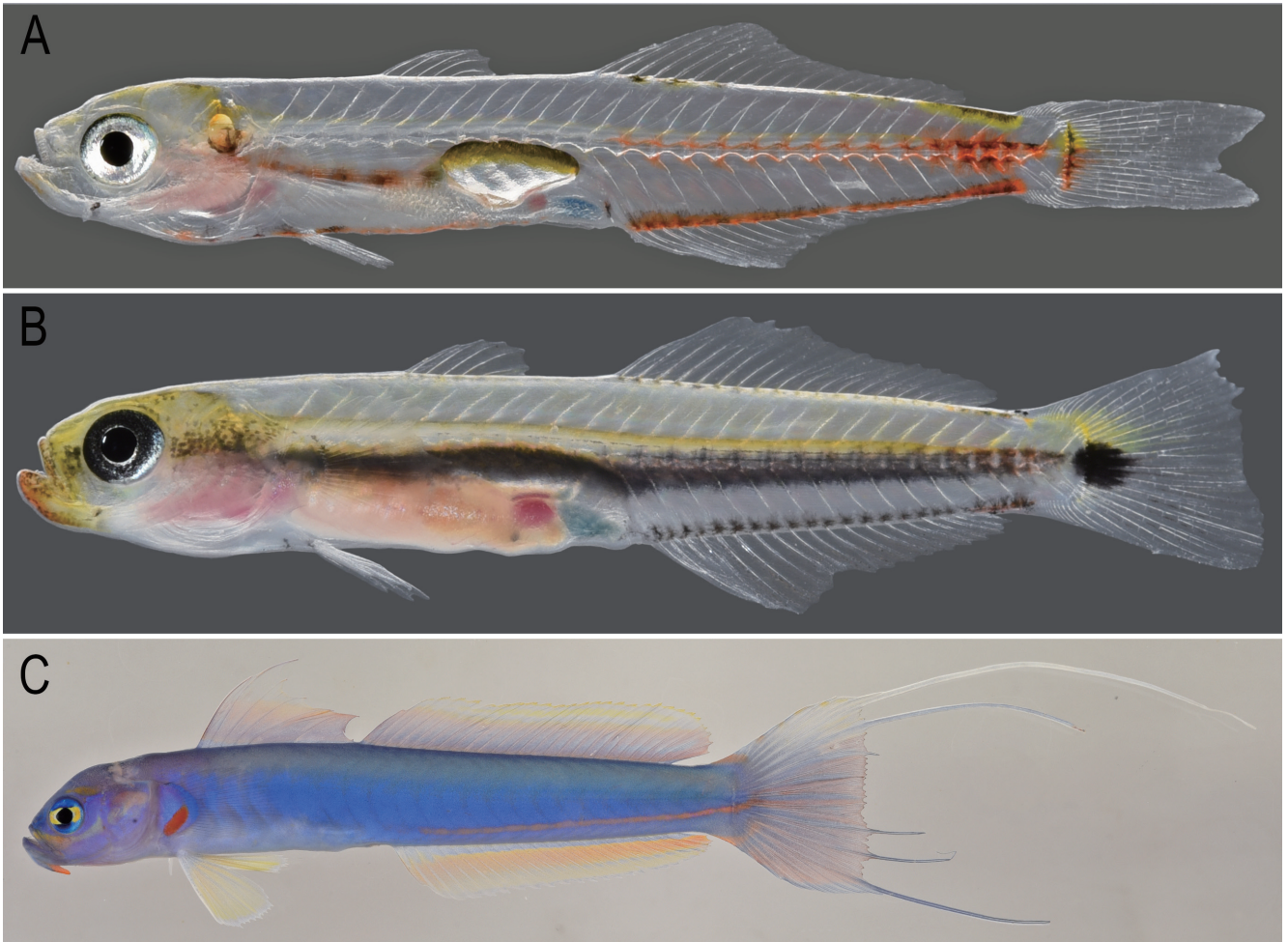


Fig. 7. Fresh specimens of *Parioglossus philippinus* (A: KAUM-I. 219465, 12.1 mm SL; B: KAUM-I. 219464, 12.8 mm SL) and *Ptereleotris hanae* (C: KAUM-I. 221867, 66.4 mm SL) from Tanega-shima island, Japan.

基質表面を、たも網を用いて約 1 m 間隔で岸壁上から掬い上げる中で採集された。3 個体は同時に採集され、同一の群れを構成していた可能性が高い。KAUM-I. 219465 (体長 12.1 mm : Fig. 7A) は成魚で見られるような色彩的特徴をもたない稚魚期にあたるが、日本産サツキハゼ属で第 2 背鰭が 18 軟条、臀鰭が 17 軟条の組み合わせをもつ種はサツキハゼ *Parioglossus dotui* Tomiyama, 1958 とベニツケサツキハゼに限られる。この 2 種は色素分布の他に縦列鱗数が異なるが (前者が 79–105 ; 後者が 61–81 : 明仁ほか, 2013), 本個体は鱗域形成が不十分であるため計数できなかった。道津 (1956) は長崎県産の全長 9.7 と 10.6 mm, 熊本県産の全長 10.8 mm のサツキハゼ仔稚魚を図示しているが, 全長 10.6 mm と全長 10.8 mm の個体は既に眼直後や尾柄部後端部に黒色縦帯が形成され始めている一方で, KAUM-I. 219465 にはそうした模様は見られない。尾柄部の色素分布に着目すると, 道津 (1958) の図示した個体は尾柄部末端から前方に先細りする様に黒色素が分布しているが, KAUM-I. 219465 に加えて, やや大きな KAUM-I. 219463 と KAUM-I. 219464 (体長 12.8–13.1 mm) においても, 尾柄部末端にあたる下尾骨後端付近には殆ど黒色素が分布していない。また, 道津 (1958) の図示した全長

9.6 mm のサツキハゼは背鰭後方の鰭条基部に黒色素が分布している一方で脊柱沿いに黒色素が分布していないが, KAUM-I. 219465 は尾柄後方の背腹縁の表面と脊柱沿いの体内に黒色素が存在することにおいても差異がみられる。本研究においては他のベニツケサツキハゼと同時に採集されたという状況証拠からも, KAUM-I. 219465 を暫定的にベニツケサツキハゼとした。同所では他に同属他種と考えられる個体は得られていない。

#### *Ptereleotris hanae* (Jordan and Snyder, 1901)

##### ハナハゼ (Fig. 7C)

**標本** KAUM-I. 221867, 体長 66.4 mm, 中種子町増田犬城海岸沖, 水深 18 m, たも網, 2025 年 11 月 30 日, 佐藤智水。

##### コチ科

#### *Cociella crocodila* (Cuvier, 1829)

##### イネゴチ (Fig. 8A)

**標本** KAUM-I. 221850, 体長 52.9 mm, 中種子町増田

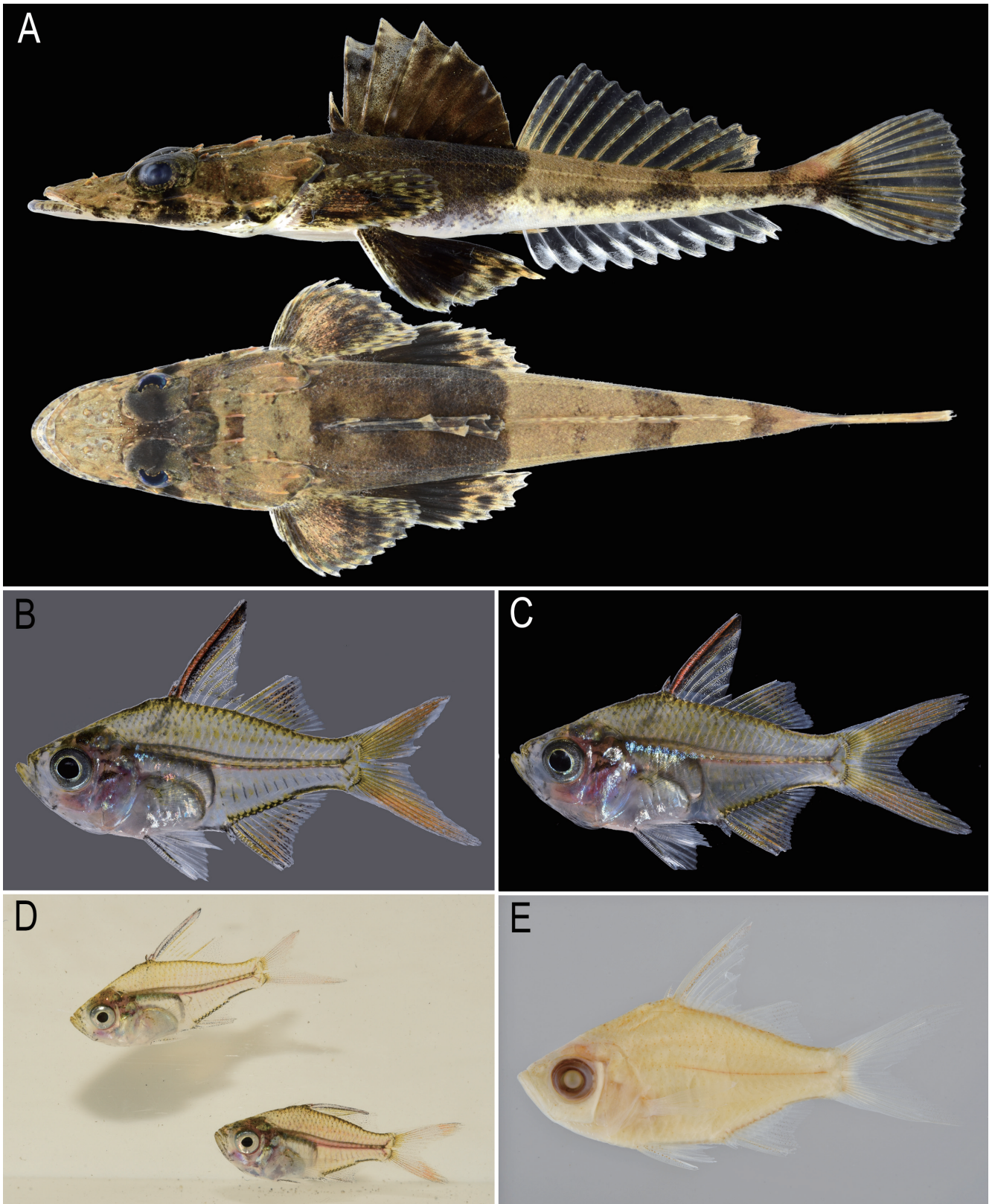


Fig. 8. Fresh specimen of *Cociella crocodila* (A: KAUM-I. 221850, 52.9 mm SL) and fresh (B, C), live (D) and preserved (E) specimens of *Ambassis interrupta* [ B: KAUM-I. 219141, 15.5 mm SL; C: KAUM-I. 219142, 15.8 mm SL; D: KAUM-I. 219141 (above individual) and KAUM-I. 219142 (below) in aquarium; D: KAUM-I. 2590, 25.2 mm SL] from Tanega-shima island (A–D), Amami-oshima island (E), Japan.

大塩屋漁港，水深0.5 m（干潮時），たも網，古橋龍星。

**備考** Motomura (2023a) が報告した標本はササノハゴチ *Rogadius patriciae* Knapp, 1987 へ再同定されたため（本村・佐藤，2025），本研究で得られた個体が種子島におけ

るイネゴチの出現を保証する唯一の標本となる。

## タカサゴイシモチ科

*Ambassis interrupta* Bleeker, 1853

ナンヨウタカサゴイシモチ (Fig. 8B–E)

**標本** 2 個体. KAUM-I. 219141, 体長 15.5 mm, KAUM-I. 219142, 体長 15.8 mm, 南種子町平山 大浦川下流域へ接続する水路, 水深 0.4 m (干潮時), たも網, 前田知範.

**備考** 種子島産の 2 個体は多数のサバヒー *Chanos chanos* (Fabricius, 1775) の稚魚 (一部を標本化: KAUM-I. 218587, 219146–219148, 4 個体, 体長 30.3–44.0 mm) が遊泳する汽水の水路から, たも網で採集された. 吉郷 (2024) は日本産タカサゴイシモチ科魚類の識別形質と分布の再検討を行い, 本種の確かな記録は八重山諸島(石垣島, 西表島, および与那国島)のみとし, 四宮・池 (1992) に基づく奄美大島からの記録は出典標本が確認できなかったことから分布に含めなかった. 鹿児島大学総合研究博物館には四宮明彦博士の収集した標本群が氏の退官に伴い寄贈されており, 四宮・池 (1992) の出典の可能性が高いと考えられる 1 標本(四宮明彦・池 俊人の両氏がナンヨウタカサゴイシモチと同定)が現存する (KAUM-I. 2590, 体長 25.2 mm, 鹿児島県奄美市住用町山間川河口・奄美大島, 1991 年 10 月 16 日: Fig. 8E). また, 米沢・四宮 (2016) は本種が鹿児島県において, 奄美大島からのみ確認され, 複数河川における河川感潮域上端付近において本種が他のタカサゴイシモチ科魚類に混じり極少数みられること, 観察される個体の体サイズが 5 cm 未満であることを記述している. したがって, 本種における従来の分布北限は奄美大島であり, 本研究で得られた 2 個体に基づき, 本種の分布北限が更新された.

## 謝 辞

中種子町長の田淵川寿広氏と久木原清貴氏をはじめとする中種子町教育委員会社会教育課のみなさま, および種子島漁業協同組合中種子支所のみなさまには, 中種子町におけるフィールド調査に関して全面的にご協力いただいた. 当時の鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアの皆さまには, 採集調査や標本の作製, 撮影, および登録においてご協力いただいた. 京都大学の松沼瑞樹氏には既報における種子島産イネゴチの再同定結果をお教えいただいた. 本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた. 本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」, JSPS 研究奨励費 (23KJ1779・24KJ1838・25KJ1986・26KJ0290), JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009), 文部

科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」, および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた.

## 引用文献

- 明仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目, pp. 1347–1608, 2109–2211. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- Bogorodsky, S. V., M. Kovačić and J. E. Randall. 2011. A new species and three new records of gobiid fishes from the Red Sea. *Cybio*, 35: 213–222.
- Chang, C.-W., K.-N. Shen and I.-S. Chen. 2025. A new species of *Luciogobius* Gill (Teleostei: Gobiidae) from northern Taiwan. *Zootaxa*, 5738: 27–31.
- Chen, I.-S., Y.-T. Ren, G.-C. Jiang, S.-C. Wang and C.-W. Chang. 2024. Three new species of *Luciogobius* Gill (Teleostei: Gobiidae) from Taiwan. *Zootaxa*, 5550: 200–212.
- 道津喜衛. 1956. サツキハゼ (新称) の生活史. 九州大学農学部学藝雑誌, 15: 489–496.
- Fujiwara, K. and H. Motomura. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Kikai Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 259 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 14: 1–73.
- 古橋龍星・是枝伶旺・本村浩之. 2020. 鹿児島県薩摩半島南岸から得られた魚類 4 種の記録. *Nature of Kagoshima*, 46: 535–539.
- 波戸岡清峰. 2013a. ウツボ科, pp. 244–261, 1786–1792. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 波戸岡清峰. 2013b. ウミヘビ科, pp. 266–277, 1794–1802. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- Hibino, Y. and S. Kimura. 2015. Revision of the *Scolecenchelys gymnota* species group with descriptions of two new species (Anguilliformes: Ophichthidae, Myrophinae). *Ichthyological Research*, doi: 10.1007/s10228-015-0485-4 (Sept. 2015), 63: 1–22 (Jan. 2016).
- Hibino, Y., S. Kimura, K. Hoshino, K. Hatooka and J. E. McCosker. 2012. Validity of *Scolecenchelys aoki*, with a redescription of *Scolecenchelys gymnota* (Anguilliformes: Ophichthidae). *Ichthyological Research*, 59: 179–188.
- 金井聖弥・小野波龍・及川 輝・田中克海・高野光喜・北田将大・武藤望生・本村浩之. 2025. セジロハゼとミズハゼ属魚類 7 種の北海道からの記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 61: 15–23.
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯 健・小枝圭太 (編). 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 200 pp.
- Koreeda, R., K. Maeda and H. Motomura. 2023. A new subtropical species of goby of the genus *Luciogobius* (Gobiidae) from southwestern Japan. *Zootaxa*, 5361: 390–408.
- 是枝伶旺・望月健太郎・清水直人・本村浩之. 2022. 奄美群島から得られた薩南諸島初記録ならびに北限記録のギンボハゼ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 24: 41–45.
- 是枝伶旺・本村浩之. 2023. 沖縄県初記録のコブキカイウツボとホシキカイウツボ, および潮間帯の礫中から得られるウツボ科魚類の記録. *Fauna Ryukyuna*, 66: 15–27.
- 是枝伶旺・本村浩之. 2025. 鹿児島県南さつま市大浦川河口におけるシラヌイハゼの出現状況と本種の産卵巣周辺に確認された溝構造. *水生動物*, 2025: AA2025-44.
- Koreeda, R. and H. Motomura. 2025. A new species of *Acentrogobius* (Perciformes: Gobiidae) from the Indo-West Pacific, with a revised diagnosis for *Acentrogobius suluensis* (Herre 1927). *Ichthyological Research*, doi: 10.1007/s10228-025-01044-9 (Nov. 2025).

- Maeda, K., N. Yamasaki, M. Kondo and K. Tachihara. 2008. Occurrence and morphology of larvae and juveniles of six *Luciogobius* species from Aritsu Beach, Okinawa Island. *Ichthyological Research*, 55: 162–174.
- 松本達也・本村浩之. 2025. 種子島から得られた標本に基づく鹿児島県初記録となるオオクチヌメリ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 61: 6–10.
- 望月健太郎・是枝伶旺・佐藤智水・本村浩之. 2022. 大隅諸島竹島から得られた北限更新記録を含む同島初記録の魚類 43 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 23: 19–31.
- 百瀬 樹. 2024. 本州から得られたヒメハゼ属魚類 4 種の記録とその識別形質についての検討. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 45: 19–45.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Motomura, H. 2023a. An annotated checklist of marine and freshwater fishes from Tanega-shima and Mage-shima islands in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 536 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 20: 1–250.
- Motomura, H. 2023b. Erratum of Motomura (2023). *Kagoshima University Museum, Kagoshima*. 1 p.
- 本村浩之. 2024. 種子島の魚類, pp. 97–104. 西之表市史編さん委員会 (編) 西之表市史. 上巻. 株式会社ぎょうせい, 東京.
- 本村浩之. 2026. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 39. [URL](#)
- Motomura, H. and S. Harazaki. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 9: 1–183.
- Motomura, H. and M. Matsunuma. 2022. Fish diversity along the Kuroshio Current, pp. 63–78. In Kai, Y., H. Motomura and K. Matsuura (eds.) *Fish diversity of Japan: evolution, zoogeography, and conservation*. Springer Nature Singapore Pte Ltd., Singapore.
- 本村浩之・佐藤智水. 2025. 種子島と馬毛島から得られた初記録の魚類 24 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 52: 1–8.
- Moyer, J. T. and M. J. Zaiser. 1982. Reproductive behavior of moray eels at Miyake-jima, Japan. *Japanese Journal of Ichthyology*, 28: 466–468.
- 中坊徹次 (編). 2013. 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野. xlix + 2428 pp.
- 中村亮太・是枝伶旺・本村浩之. 2025a. 鹿児島県本土と宮古諸島で採集されたマツゲハゼの記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 57: 20–27.
- 中村亮太・大井真人・是枝伶旺・本村浩之. 2025b. 宮崎県および静岡県から得られたタテガミハゼの記録, および成長に伴う体側鱗の形態変化. *日本生物地理学会会報*, 80: 69–78.
- 緒方 隆. 2023. 青いリボン海中に彩り. ハナヒゲウツボ 西之表沖に生息. *南日本新聞*, 2023 年 9 月 16 日.
- Pezold, F. L. and H. K. Larson. 2015. A revision of the fish genus *Oxyurichthys* (Gobioidae: Gobiidae) with descriptions of four new species. *Zootaxa*, 3988: 1–95.
- Regan, C. T. 1905. On a collection of fishes from the inland sea of Japan made by Mr. R. Gordon Smith. *Annals and Magazine of Natural History (Series 7)*, 15 (85): 17–26.
- Sabaj, M. H. 2020. Codes for natural history collections in ichthyology and herpetology. *Copeia*, 108: 593–669.
- Senou, H. 2020. *Silhouettea dotui*, p. 1123. In Koeda, K. and H.-C. Ho (eds.) *Fishes of southern Taiwan*. National Museum of Marine Biology & Aquarium, Pingtung.
- 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾. 2004. 決定版 日本のハゼ. 平凡社, 東京. 536 pp.
- 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾. 2021. 新版 日本のハゼ. 平凡社, 東京. 588 pp.
- 渋川浩一. 2014. ミミズハゼ属の一種, p. 530. 本村浩之・松浦啓一 (編) 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば.
- 渋川浩一・藍澤正宏・鈴木寿之・金川直幸・武藤文人. 2019. 静岡県産ミミズハゼ属魚類の分類学的検討 (予報). *東海自然誌*, 12: 29–96.
- 渋川浩一・武藤文人・鈴木寿之・藍澤正宏. 2017. 浜名湖から得られたハゼ科サルハゼ属の 1 未記載種と日本産同属魚類の分類の現状. *東海自然誌*, 10: 45–57.
- 四宮明彦・池 俊人. 1992. 奄美大島における陸水域の魚類相. 鹿児島大学水産学部紀要, 41: 77–86.
- Snyder, J. O. 1912. Japanese shore fishes collected by the United States Bureau of Fisheries steamer “*Albatross*” expedition of 1906. *Proceedings of the United States National Museum*, 42: 399–450, pls. 51–61.
- 和田英敏・古橋龍星・山田守彦・藤井琢磨・吉田朋弘・Kunto Wibowo・荒木萌里・伊藤大介・赤池貴大・中川龍一・渋谷駿太・是枝伶旺・出羽優風・餅田 樹・本村浩之. 2021. 徳之島初記録の魚類 122 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 7: 35–52.
- 米沢俊彦・四宮明彦. 2016. ナンヨウタカサゴイシモチ, p. 84. 鹿児島県環境林務部自然保護課 (編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 — 鹿児島県レッドデータブック 2016—. 一般財団法人鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.
- 吉郷英範. 2014. 琉球列島産陸水性魚類相および文献目録. *Fauna Ryukyuana*, 9: 1–153.
- 吉郷英範. 2024. 日本産タカサゴイシモチ属魚類 *Ambassis* (棘鱗上目: タカサゴイシモチ科) の形態的特徴と性的二型. 比和科学博物館研究報告, 65: 65–87.
- 幸大二郎・是枝伶旺・本村浩之. 2025. 鹿児島県種子島から得られた日本国内 2 例目のギブスアマクサヨウジの記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 58: 13–16.
- Yuki, D., H. Motomura, H. Wada, M. Aizawa, K. Sakamoto and R. Ueshima. 2025. A list of syngnathid (Teleostei) specimens deposited in the Department of Zoology, the University Museum, the University of Tokyo. *The University Museum, the University of Tokyo, Material Reports*, 139: 31–45.
- Yukihira, H., T. Shibuno, H. Hashimoto and K. Gushima. 1994. Feeding habits of moray eels (Pisces: Muraenidae) at Kuchierabu-jima. *Journal of the Faculty of Applied Biological Science, Hiroshima University*, 33: 159–166.